

学会発表等 (所属については発表時のものを掲載した。)

**機器分析法による下痢性貝毒の試験法の検討**

佐々木珠生 小中ゆかり 福田 裕

第30回生活衛生関係業績発表会  
(兼地域保健研究会第二分科会)

2017. 3. 17 広島市

LC-MS/MSを用いた下痢性貝毒(OA, DTX1)の試験法について、検討を行った。試験溶液を5倍希釈することで、マトリックス効果を低減することができた。カキについてはODS ミニカラム, アサリ, ムラサキイガイについてはPRiME HLB ミニカラムを用いて精製を行う方法について妥当性評価を行ったところ、すべての項目で性能基準を満たすことが確認された。

**広島市のパレコウイルス検出状況**

則常浩太 藤井慶樹 八島加八

山本美和子 松室信宏

第19回地域保健研究会(第1分科会)

2017. 2. 6 広島市

パレコウイルス(PeV)は17種類の血清型/遺伝子型が報告されている。特にPeV-3型は2, 3年ごとに流行を繰り返す。時に重篤な症状を引き起こす。2016年は全国的にPeVが2014年に次ぐ流行となった。症状はPeV-1型では、多くの患者で発熱と胃腸炎症状がみられた。PeV-3型では全員に発熱がみられ、その他には発疹、胃腸炎症状など多様な症状を示した。系統樹解析の結果、PeV-3型の多くが、2014年検出株と2016年検出株とで別のクラスターを形成した。PeV-3型は2, 3年ごとに流行を繰り返していることから、この間にウイルスに何らかの変異が起こっている可能性が示唆された。

**ダニ媒介感染症の後方視的解析**

藤井慶樹 則常浩太 八島加八

山本美和子 松室信宏

第19回地域保健研究会(第1分科会)

2017. 2. 6 広島市

2012年から2015年までの期間に当所で検査を行った重症熱性血小板減少症候群(SFTS)、日本紅斑熱、つつが虫病等のダニ媒介感染症疑い事例について、患者調査票等を参考にして疫学情報を整理するとともに、患者から検出された病原体の遺伝子解析を行った。SFTS、日本紅斑熱は春から秋にかけて患者が発生しており、マダニの活動が活発な時期と一致していた。一方、つつが虫病は秋から初冬にかけて集中的に患者が発生していた。

市内における発生状況や侵淫している病原体の解析を今後も継続し、適切な情報提供と予防啓発を行うことが重要である。

**2016年に広島市で分離された腸管出血性大腸菌の分子疫学的解析**

千神彩香 青田達明 栗林智早

坂本 綾 竹原佑美 池田伸代

清水裕美子 京塚明美 松室信宏

第30回生活衛生関係業績発表会

(兼地域保健研究会第二分科会)

2017. 3. 17 広島市

2016年に広島市で腸管出血性大腸菌 O157 を原因とする散発7事例及びメンチカツ関連広域食中毒1事例が発生し、患者便及びそうざい半製品(冷凍メンチカツ)から腸管出血性大腸菌 O157 12株が分離された。これらの菌株について、感染事例間での疫学的関連性を検討するため、PFGE法、IS法及びMLVA法の3法を用いて分子疫学的解析を実施したところ、メンチカツ関連広域食中毒事例の患者由来株1株及び冷凍メンチカツ由来株3株で3法のパターンが一致した。また、散発事例患者由来株2株で3法のパターンが一致したが、事例間の疫学的関連性は認められなかった。解析結果の解釈には疫学情報を照らし合わせながら総合的に判断することが重要であると考えられる。

広島市における大気中揮発性有機化合物 (VOCs)  
の状況

加藤寛子 神田康弘 原田敬輔

村野勢津子 坂本哲夫

第43回環境保全・公害防止研究発表会

2016. 11. 17～18 山形市

有害大気汚染物質のモニタリングにおいて、同時分析している揮発性有機化合物 (VOCs) 50 物質について平成 25～27 年度の調査結果を解析し、地点ごとの特徴や物質間の関連性を調査した。

物質間の相関係数が高かったグループ内の物質は、地点により差があるものの主成分分析においても同じ傾向を示しており、関連性が高いことが示唆された。また、市内の PRTR 届出排出量から、トルエン及びキシレン等の物質は周辺の発生源の影響が示唆された。1,2-ジクロロエタン及び1,2-ジクロロプロパンは市外から流入している物質であり、発生源が同じか、発生源が異なっても市内に流入してくるまでの間に気象等の影響を受け、同じ変動を示していると考えられた。